第26回 山梨県介護老人保健施設大会抄録用紙

| | |
|---|---|
| 演 題 | 本当の姿を見つめていますか？ |
| 副 題 | ～わたしはわたしとして生きていきたい～ |

| | |
|---|---|
| フリガナ | カイゴロウジンホケンシセツ　コウフカワセミエン |
| 施 設 名 | 介護老人保健施設　甲府かわせみ苑 |
| フリガナ | カンゴシ　イイノ　マドカ |
| 発表者(職名・氏名) | 看護師　飯野　まどか |
| フリガナ | ニンチショウケアコウジョウイインカイ |
| 共同研究者 | 認知症ケア向上委員会 |

【はじめに】
A氏はアルツハイマー型認知症を患っており、以前生活していた施設からのサマリーには『依存的である』と記されていた。今回、A氏の生活場面での姿から、A氏らしさとは？という視点で向き合い、尊重した関わりを行うことによって、行動の変化が現れたため、ここに報告する。

【倫理的配慮】
発表に際し口頭で本人と家族の同意を得、個人情報と秘密保持へ配慮した。

【事例紹介】
A氏/80歳代/女性/要介護3　診断名：アルツハイマー型認知症（長谷川式簡易知能評価　13/30点）近時記憶の障害はあるが、コミュニケーションは良好である。車椅子を使用しているが、両上肢の麻痺症状はなく食事や車椅子の移動も自分で行っている。食事時、同テーブルの配膳が終わるまで食べずに待っている姿や、看護学生が担当した際には、「お腹空いているでしょう、これを食べていいよ」という言葉も聞かれ、他者を気遣う場面がみられる。

【経過】
A氏は入浴前、自分で衣類を脱ごうとする動作がみられていた。周囲には介助により衣服を脱ぎ終え、入浴の順番を待っている他利用者が数名いた。A氏は落ち着かない様子で周囲を見渡し、スタッフが介助に入ると、自分の手をとめ、スタッフに任せる様子がみられた。介助中は何度か「ありがとう」「悪いね」と伝える姿があった。A氏の生活の様子やPTの介入からも、手指の可動域に制限はなく、衣類の着脱時もA氏にできる部分があるのではないかと考えられた。また、A氏の姿から、自分で行おうとする意欲も感じられた。このことからA氏の持っている能力を活かす支援について検討した。

【取り組み】
衣類を脱ぐ時間に余裕ができるように、入浴へ向かう順番を早くする。
意欲を刺激できるように、着脱行為を自分で行っている他者と並びになるような環境を作る。
心理的な不安の軽減に繋がるように、A氏のペースで行えるような声かけを工夫する。

【結果】
入浴時、衣類を脱ぐ際には、周囲を見渡しながら他利用者と談笑し、ゆっくりであるが洋服を自ら脱いでいる姿がみられた。「入浴までに時間はたくさんありますので、ゆっくりで大丈夫ですよ」というスタッフの声かけに「ありがとう」と答え、介助が必要である場面でも、全てを任せるのではなく、A氏が出来ることを探し行っていた。また、入浴後にはスタッフに対して「自分でできることは自分でしないとね」と笑顔で語りかける姿がみられた。

【考察】
入浴介助の時間は慌ただしく忙しい時間である。今回A氏が入浴前に落ち着かない様子で周囲を見渡す姿は、周囲で動くスタッフの忙しさを感じていたのではないか。そして自分でできることがあるなかでも、周りのペースへ合わせることが難しいことから、スタッフにやってもらうという選択肢しかなかった。このことが、「ありがとう」「悪いね」と何度も伝える姿へと繋がっていたのではないかと考える。実際にA氏の普段の生活場面からは、他者への気遣いを感じられる場面が多く見られた。このようなA氏の姿にスタッフが気付き、自分たちが作り上げている効率を優先しすぎた環境が、A氏の混乱を招いているのではないかと考えた。そしてこのことが、A氏の意欲低下へと繋がり、出来ることを奪っているのではないかと考えられた。A氏と向き合い、A氏らしさとはなにかを考え、取り組んだ結果見られたA氏の姿は、けして依存的なものではなかった。認知症の人は記憶の障害はあるがきちんとした自分の意思がある。出来ることを自分で行おうとする姿や前向きな言動、力強い笑顔こそがA氏の本当の姿であったと考える。

【おわりに】
介護の現場は人手不足もあり毎日が慌ただしく過ぎていくことがほとんどである。そのような中で、自分たちはどこかで「忙しいから、時間がないから、仕方がない」という思いを持ち、自分を納得させているのではないか。今回実施した取り組みは大変な準備や多くの時間をかけたわけではない。大切なことは、短い時間でも最も近くで関わることができるその時間をしっかりと向き合い、認知症の人の想いを理解し、その意思を守っていくこと、それが自分たちの役割である。